

研究主題

荏隈小学校における自尊感情の育て方

— 荏隈小メソッドを通して（質問紙調査の実施・分析・協議） —

研究仮説

自尊感情に関する質問紙調査を実施・分析し、子どもに適した指導のあり方を協議することで計画・検証・改善していけば、子どもの自尊感情を育てることができるであろう。

2022. 12. 26

大分市立荏隈小学校

教諭

久保千恵子

目次

	(ページ)
はじめに	1
I 研究主題・設定の理由	2
II 研究仮説	3
III 研究内容	3
IV 研究方法・計画	3
V 研究の実際	4
VI 研究のまとめ・成果と課題	10

資料

	(枚数)
1. 質問紙	①
2. 質問紙調査について	②
3. 分析について	①
4. 分析結果ー全体学年学級ー	⑦
5. 行動療法	①
6. ワークシート	②
7. 協議結果まとめ (5/20)	①
8. 実践のシェア (8/31)	⑥
9. 生徒指導通信	②
10. アドラー心理学	⑪
11. 実践例	②
12. 子どもの変容	⑩

はじめに

これまで長年、校内研究の担当という立場で、授業研究に関わらせていただいた。また、小教研の事務局員の立場や小生研の研究者という立場等でも、授業研究を積み重ねた。その間、どうすれば子どもが授業に関心をもち、どうすれば内容の理解が深まるかを、推進する立場で考えてきた。そのなかで、教科研究だけでは明らかに不十分であり、子どもの状態をしっかりととらえることや、子どもの心の状態に目を向けることに必要性を感じた。

なかでも、子どものやる気を生む自尊感情の育ちについて、特に関心をもった。走ることが速い子や学習ができる子、自己表現の上手な子は、集団の中に心地よい居場所があると思う。自分に自信のない子の心の状態は、どうなっているのか。適切な手立てがあれば、心はすこやかな育ちへと向かうことができるだろうか。

自尊感情のタイプ別判断テストや尺度質問紙は、数多く考えられている。質問紙調査を実施・調査・分析し、子どもの実態を把握することは大変意味のあることで、ここからすべてが始まる。このデータを基にして、目の前の子どもにふさわしいと考えら

れる手立てを見付けることこそが、必要なものであろう。対応に追われてしまいどうしても対処的になりがちな教師の取組を、事後ではなく事前にシフトしていく。問題に追われるのではなく、問題そのものをとらえ、未然に防げたいと思う。病気において、予防にまさる治療はないように、未然に防ぐことは重要であることに間違いない。

自尊感情の育ちをキーワードにして、荏隈小学校での取組を進めていきたいと思う。



《 協議の様子 》

I. 研究主題及び設定の理由

(1) 研究主題

荏隈小学校における自尊感情の育て方

ー荏隈小メソッドを通して (質問紙調査の実施・分析・協議)ー

(2) 設定の理由

子どもは、学校が楽しいと感じているのだろうか。生き生きと活動できているのだろうか。学校は心地よい存在ではなくなっていると感じている子どももおり、行きたい場所ではなく、行かなくてはならない場所やなるべくなら行きたくない場所になってはいないか。それでは、自発的な学びなど望めるはずもない。不適応症状が表出しても無理はない。

子どもが、本来の姿を取りもどすためには、学校はどうあるべきか真正面から考えて行かなくてはならない。その場合のキーワードを自尊感情とした。できないことすべてを包括した自分を認めるためには、教師と友だちがいる学校が果たす役割は大きく、自信・やる気・確かな自我が必要である。

自尊感情の質問紙調査で、子どもの実態をつかむ。一人一人は勿論のこと、集団としてもとらえる。荏隈小学校の子ども全体の姿を共通化する。そして望むべき姿を念頭に置き、現状での学年やクラスの状態と比較する。そして、改善の手立てを全体と小グループで討議する。その成員は、学年を解いたり学年部で構成し協議内容に応じたものにする。しかし、子ども一人一人を見つめることは忘れてはならない。集団の特徴は、立場の弱い子に顕著に出がちである。クラスに気になる子がいたら、その子の行動がそのクラスの様子を示している。その子が変わることができたら、クラスも変わる。

まずは、子どもの実態のつかみ方(課題が明らかになる分析方法)、次にその課題を解決する手立ての協議。(教職員全員で共通理解し、気持ちをそろえる。)そして、検証をこれらを繰り返すことで、子どもの自尊感情は育つのか。実証していきたい。

Ⅱ. 研究仮説

自尊感情に関する質問紙調査を実施・分析し、子どもに適した指導のあり方を協議することで計画・検証・改善していけば、子どもの自尊感情を育てることができるであろう。

子どもの自尊感情を育てるにはどうしたらよいのだろうか。学業やスポーツに秀でている子どもばかりではない。より多くの子どもは自分に自信がもてるものをもっていない。その子どもの心の状態を自尊感情の三つの観点から分析して、加えるべき手立てを教職員全体で協議し検証する。

子どもに適した指導を具体的にどのように計画していけばよいか。そして、実行するにはどんな手だてがあるか。成果があるものは継続し、課題が残るものは改善していかななくてはならない。計画・検証・改善を繰り返していく。

Ⅲ. 研究内容

1. 質問紙調査

- (1) 自尊感情の三つの観点に沿った質問紙調査 [資料1参照]
- (2) 質問紙の実施方法 [資料2参照]

2. 分析

- (1) 分析方法 [資料3参照]
- (2) 分析結果 [資料4参照]
 - ・全校・学年・学級
 - ・帯グラフ・レーダーグラフ

3. 協議

- (1) 行動療法の取り入れ方 [資料5参照]
- (2) 協議 [資料6・7・8・9参照]
- (3) アドラー心理学の取り入れ方 [資料10参照]

4. 検証 一振り返り・繰り返しー

- (1) 持続した実践のためにー荏隈小メソッドー [資料8参照]
- (2) 実践の紹介 [資料11参照]

5. 変容

- (1) 全校 [資料12参照]
- (2) 各学年 [資料12参照]

Ⅳ. 研究方法・計画

- 一学期 ○実態把握・分析
○協議 異学年集団
- 二学期 ○協議 同学年部
○実態把握・分析
- 三学期 ○振り返りと繰り返し
○荏隈小メソッドの確立



V. 研究の実際

子どもの心の状態はどうだろうか。自尊感情が「高い」「低い」は、どのような状態だろうか。そもそも自尊感情を、本校教師はどのようにとらえているのだろうか。自尊感情についての学習も必要であろうし、その視点で子どもを見取ることから始まるだろう。子どもの行動に表れるその奥にある心の動きに着目したい。

子どもの様子をつかむためには、まず日常の見取りを適正に行うことが大切である。常に子どもの様子に気を配り、それに応じた手立てを加えることは指導の大前提である。しかし、どうしても主観的になる。主観に陥らないためにも、客観的な視点が求められる。

そこで、科学的なデータが得られる質問紙調査を、実態調査の根幹として全校で実施した。大規模なデータの活用は、集団としての傾向が数値として得られる。汎用性も高く、子どもの変容から手立ての検証も容易になる。また、全教職員での協議は、共通認識が生まれ共通理解も得られると考えた。

1. 質問紙調査

(1) 自尊感情の3観点に沿った質問紙調査

自尊感情とは、自分のできることできないことなどすべての要素を包括した意味での自分を、他者とのかわり合いを通してかけがえのない存在や価値ある存在ととらえる気持ちである。それを構成する因子を3つのまとまりに分け3つの観点とし、自尊感情の傾向を把握することとした。

自尊感情測定尺度の質問紙を使用し、実態をつかむこととする。

(参考・東京都教職員研修センター) [資料1 参照]

①自己主張・自己決定 ー質問項目11・12・13ー

今の自分をそのままに受け止め、自分の可能性に気付いているかを調査する。子ども自身が考える場面を増やし、子どもが自分自身で決めていくような学習活動・指導支援に心掛けると効果的であると考えられている。

②関係性のなかの自己 ー質問項目8・9・10ー

多様な人との関わりを通して、自分が周りの人に役立っていることや周りの人の存在の大きさに気づけているかを調査する。ペア・グループ活動を積極的に取り入れ周囲とのつながりを意識させたり、学習や友人関係の構築について支援すると効果が期待できるとされている。

③自己評価・自己受容 ー質問項目5・6・7ー

自分のよさを実感し、自分を肯定的に認められることができているかを調査する。この観点は、教師との関係において影響が大きいことから、教師の評価や言葉掛けによる効果が期待される。頑張れても頑張れなくても認めてくれる周囲の存在を実感させたい。

④生活習慣 ー質問項目1・2・3・4ー

早起き・朝ご飯・あいさつ・言葉使い等の生活習慣についても調査する。

(2) 質問紙調査の実施方法

①実施時期

年2回 5月上旬と10月下旬に実施する。

②全校実施

1学年から6学年に実施する。ただし1年生は年1回とする。

[資料2 参照]

2. 質問紙調査の分析

(1) 分析方法

調査結果の分析には、いくつかの方法がある。今回は、観点毎のバランスや学年間の差異の状態と全体のバランスなどを見ていきたい。それで、数値化して、全体・学年毎・各学級でまとめる。全校での値との比較で、子どもの実態をつかむ。帯グラフ・レーダーグラフで表し、視覚的にとらえやすくする。

また、「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と解答した子どもの層に着目するために、「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と解答した数のパーセントをもとにしてレーダーグラフで表す。レーダーグラフで外側に向かっている項目が、努力を要するものである。正三角形や正六角形に近い形である方が望ましい状態である。つまり、外側に突出している観点やバランスのよくない学年・学級に、何らかの指導、支援が必要と考えられる。〔資料3参照〕

(2) 分析結果

①全校の傾向

「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と解答した子どもが20%である状態を基準として考えた。

3観点のバランスで考えると、

- ・【自己主張・自己決定】は、自分は周囲に比べ負けないことがあると感じている子どもは、そう多くはないが概ねよい傾向である。
- ・【関係性の中での自己】が、最も良好な状態を示している。周囲との関係友人関係は比較的よいと考えられる。
- ・【自己評価・自己受容】においては、概ね値が低く、特に「自分が好き」と答えられない子どもが、比較的多く存在する。

これらから、荏隈小学校の子どもの全体的な傾向としては、良好な回答をしている子どもが多い中、自分のよさが実感できず、自分を肯定的に認められない状態もみられる。勿論、多数の子どもが良好な回答をしている。けれども、よい状態にない子どもが、集団の雰囲気にながら影響は大きい。また、少数であっても複数であれば、学級・学年への干渉は大きくなる。個人のデータと比較すれば、より明らかとなろう。

また、全校の傾向を基準としてとらえ比較すると、各学年の傾向も一層明らかになる。

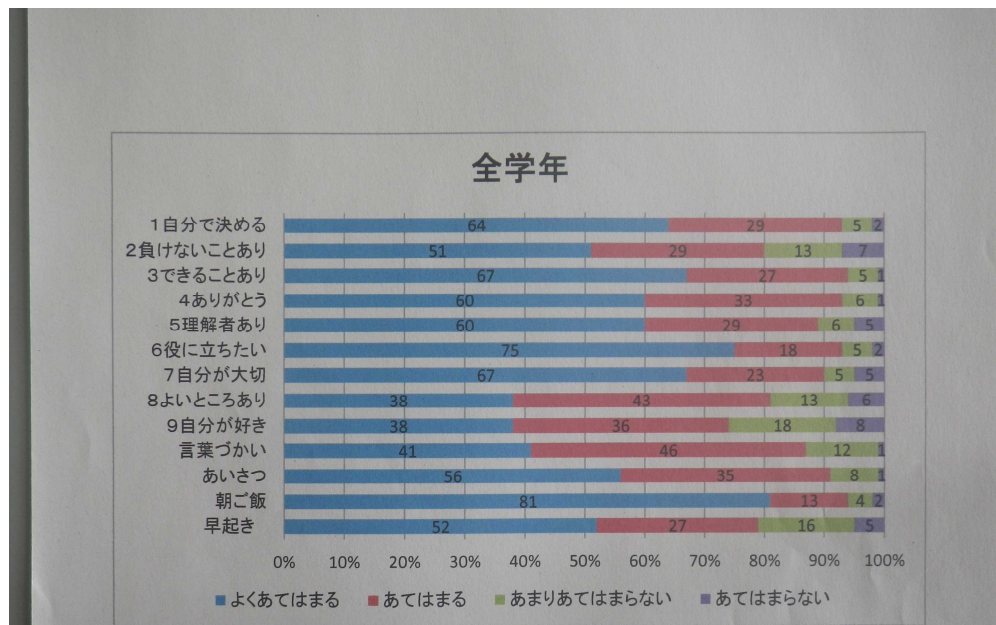
〔資料4参照〕

資料4をみると、学年が上がるにつれて【自己主張・自己決定】【関係の中での自己】【自己評価・自己受容】のどの項目でも努力を要する方向へと進む傾向にある。そして、多少の違いはあれど、【自己評価・自己受容】においてその傾向が激しくなる。一定の割合で学年が上がるごとに増加しているのだ。自己評価が低くなり、自己受容ができにくくなる子どもが増える。三角形が鋭利な形となる。また、資料4で学年毎に3観点のバランスを見てみると、高学年ほど外側に向かって広がっている。

〔資料4参照〕

これらから、荏隈小学校の子どもの自尊感情の育ちを望むなら、それを構成する3つの観点の【自己主張・自己決定】【関係の中での自己】【自己評価・自己受容】のなかで、特に【自己評価・自己受容】の観点から手立てを考えていくことが有効であることが分かる。

加えて、低学年のうちは、まだその傾向が表れてないので、低学年のうちから計画的に継続的に手立てを加えていけば、現在の傾向が押さえられると考えられる。全教職員で意識をともにし、手立てを共通化していけば望む方向への変容が可能となるかもしれないと考えた。



《 荏隈小学校全校結果分析 棒グラフ 》

②各学年

検査結果を各学年毎にまとめる。全体の傾向をつかむのと同様に各学年の傾向をつかむことも必要である。全体と比較して学年の傾向をつかむ。隣接学年との差異を見ることも有効であろう。手立てを加えなければいけない視点もはっきりとしてくる。

- 第2学年 ・【自己評価・自己受容】の観点が低い。
・「自分のことが好きか」の項目で否定的な回答の割合が多い。
 - 第3学年 ・【自己評価・自己受容】の観点が低い。
・「自分のことが好きか」の項目で否定的な回答の割合が多い。
・「よいところあり」や「理解者がいる」の項目が良くない。
 - 第4学年 ・【自己評価・自己受容】の観点が低い。
・「自分のことが好きか」の項目で否定的な回答の割合が多い。
 - 第5学年 ・【自己評価・自己受容】の観点が低い。
・「自分のことが好きか」の項目で否定的な回答の割合が多い。
・「よいところあり」の項目でも否定的な回答が比較的多い。
 - 第6学年 ・【自己評価・自己受容】の観点が低い。
・「自分には負けないところがある」の項目で否定的な回答が比較的多い。
- 〔資料4参照〕

学年の傾向を大まかにつかんだら、各学級のデータと比較して学級の状況を知る。学校全体で共通した手立てを加えていくのだが、常に学級単位の実態を念頭に置いて、実態に対応した手立てを探ることが大切である。

3. 協議

自尊感情の3観点のうち【自己評価・自己受容】の指導に工夫が必要であること。そして、この観点は教師による評価や言葉掛けによる効果が大きいこと。この2点が明らかになっている。では、荏隈小学校の子どもにどのような手立てが必要なのか。全教職員による協議において追求していくこととした。

基本的立場を同じにするためには、知識の伝達だけでは効果は望めない。教師自らが考え実行していくためには、協議が効果的である。先行研究の成果を参考にしつつも、荏隈小学校の子どもに適した手立てを話し合いで探っていく。協議により明らかになった手立ては有効であると考え。また、協議の過程そのものも教師の学びの面から、協議結果の内容と同じくらい大切である。

協議をより有効にするためには、ただ話し合うのではなく、視点をしぼり意識を集中して内容を充実させたい。こうした協議を可能とするためには、どうしたらよいのだろうか。そのためには、まず明らかになっているところとこれから明らかにすべきところを、整理する。そして、どのように評価を行い、どのような手立てをどのように加えればよいのか。これらを整理して、協議を構成することができればと考えた。

また、忘れてはならないことがある。子どもとの関係を良好に築ける教師とそうでない教師がいることである。どちらも子どものよりよい育ちを目指し、切磋琢磨しているのだが結果に差が出る。子ども自身の認知の歪みとそれに対する教師の認知の歪みを理解しなくてはいけない。例えば、清掃中に急にお腹が痛くなり、手を止めた子どもが居たとしよう。何と声を掛けるだろうか。いつも手をぬく子だからと考えて「手ぬきしてないで掃除しないと」と言っていないだろうか。見える行動をどうとらえていけばよいのかを、考えていかななくてはならない。

認知の歪みを理解するベースの考え方は、行動療法が効果的だと思う。行動療法の考え方を共通のベースに置き、より具体的な手立てを探っていく。これらの協議方法を実践した。

(1) 行動療法の取り入れ方

認知行動療法とは、認知に働き掛けて気持ちを楽にする精神療法（心理療法）の一種である。

(参考・認知行動療法センター)

ものの受け取り方や考え方という意味で、ストレスを感じると悲観的に考え問題を解決できないところの状態に追いこまれるのだが、この療法では、考え方のバランスをとってストレスに上手に対応できる状態をつくっていく。

学校現場で活用する場合、主に教師が子どもに行うこととなる。子どもは、教師からのメッセージを主に言葉で、そして行動で受け取る。表情やノートの書きこみやしぐさ等である。教師が行動療法のマインドに気付き、自分の言動にこれまでより意識を向ける。たくさんの書籍が存在するが、紹介するだけでは、はじめの一步を踏み出せない。そこで、初歩的な入門として、パワーポイントを使用し、内容をしぼって紹介した。これは、自尊感情に対する共通認識にもつながると考えた。

《 行動療法についてのパワーポイントの活用 》

- ①内容 ・ 行動療法の意義と実際 小学校の現場での活用法
- ②説明時期 ・ 5月と10月 調査後結果分析から手だてを考える協議の前
- ③時間 ・ 45分の内容を2回する。 [資料5参照]

(2) 協議

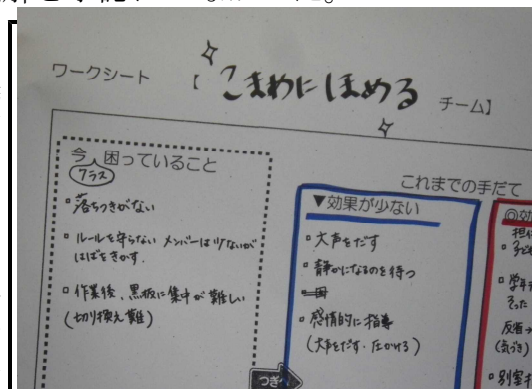
集団で討論すると、いろいろな視点での意見が集約される。見識が広がることは、間違いない。ただし、論点を明確にしておかないと、話の流れの収集がつかなくなり、せつかくの時間の実りが少ない。絶えず話の方向性に留意することが必須である。会を進行する司会者は、その主旨を理解し円滑に進めることを役割とする。また、話し合うメンバーと人数も重要であり、考慮を要する。第1回は異学年、第2回は同学年で4人を基本とした。

○1回目 5/18

- ①目的・第1回目の質問紙調査の結果を基に、実態をつかみ分析するとともに、自尊感情を育てる実態に合った手立てを集団で考えていく。
- ②時期・質問紙調査の結果を集約した後で実施する。
- ③方法・グループ分け4～5人 分析結果の同じ特徴をもつ異学年で構成。
 - ・司会者 生徒指導部会員（会の主旨を理解し、円滑に進める。）
 - ・記録者 意見を模造紙に分かり易くまとめる。（3色を有効に使う。）
 - ・発表者 まとめられた模造紙を使い、意見をシェアする。
- ④結果・教師の承認とそれを表す声掛け・居場所としての学級づくりに意見が集まった。
[資料6参照]
- ・協議そのものが教師の相互理解と承認につながった。

⑤協議結果から実践へ

- ・協議結果の手立てを日常的に実行していくために、各会議を利用して内容について発言したり文書にしたりして配布する。
[資料7参照]



○2回目 8/31

- ①目的・実施した自尊感情を育てる手立ての検証と改善について協議する。効果的であった手立てを集団でシェアする。
- ②時期・運動会の練習前に実施する。 《 意見をまとめた模造紙 》
- ③方法・グループ分け2～3人 各学年部で構成。
 - ・発表者 意見をシェアする。
- ④結果・声掛けの有効な場面設定のもと、具体的な事例で手立てを考えた。
 - ・前回同様に協議そのものが、教師の相互理解と承認につながった。
 - ・運動会練習開始前で共通理解が有効に作用する。
[資料8参照]
- ⑤協議結果から実践へ
 - ・協議結果の手立てを日常的に実行していくために、各会議を利用して内容について発言したり文書にしたりして配付する。
[資料9参照]

○3回目 11/2

- ①目的・第2回目の質問紙調査の結果を基に、子どもの変容をつかみ、これまでの手立てを検証し改善する。
- ②時期・質問紙調査（10月下旬実施）の結果を集約した後で実施する。
- ③方法・学年部で協議する。
 - ・主に成果に目を向ける。
 - ・成果のあった学年の実践をシェアする。
- ④結果・教師のやる気と意欲が育った。（教師の相互認証）
 - ・協議そのものが教師の相互理解と承認につながった。
- ⑤協議結果から実践へ
 - ・協議結果の手立てを日常的に実行していくために、各会議を利用して内容について発言したり文書にしたりして配付する。

※【アドラー心理学の勇気づけ】

これまでの成果を次の実践につなげるために、教師自身も自信をもって、指導に向かうことが可能となるために、【アドラー心理学の勇気づけ】のセッションを短時間であるが実施した。日々の指導で疲弊しがちな教師が、互いに認め合い明日の指導への自信を取りもどせた。
[資料10参照]

4. 検証 ― 振り返りと繰り返し―

(1) 持続した実践を可能にするために

理論は実践しなくては、意味がない。そして、実践を振り返り成果と改善点を整理しながら、手立てをバージョンアップする。さらに、繰り返し実践することで、成果は上がる。

まずは、振り返ること。1週間に一度は、振り返りの時間をもつことで効果が上がる。学年会は、行事等の確認になってしまいがちだが、子どもの様子を交流する時間を意識してもらいたい。今年度は時間の確保の面から週の時間割を見直し精選することで、昨年より15分の時間を生み出した。少しの時間でも積み上げれば、かなりの時間になる。子どもの様子を共有し、わずかな子どもの変容を見逃さずに、手立ての検証をする。成果も実感できるし、効果的な手立ては共通できる。ただ漫然とした感覚に頼っての指導ではなく、共通した視点を持ちそれを意識した指導が可能となる。

次に、繰り返すこと。成果を上げる上で大切なポイントである。子どもは絶えず成長している。昨日までと今日と明日は違う。これまで効果的な指導であっても周囲の変化の影響を受けて、効果が変化する。これを意識すると指導が子どもに対応したものになる。また、《協議して検証する》サイクルを繰り返すことで、一つのやり方に固執することを防げる。一度成功するとその成功体験からか、どの子にもいつも同様の指導をしてしまいがちになることからぬけ出せる。常に新たな気持ちをもちたい。そして、もたなくてはいけない。

調査（実態把握）→ 分析 → 協議 → 検証・改善
↑
（具体的な方法）

ポイント

- ① 学年部での振り返りの時間を確保する。
- ② 協議から検証そして改善の繰り返しを大切にする。

(2) 実践の紹介

① 全校での取り組みの実践事例

全校の各活動に、「声掛け」の実践を組み入れていく。既存の活動の見直しをする。本校では、3部会の活動を毎月見直して活性化を目指している。

例えば、9月は、学習部では、「発表がんばり週間」、生徒指導部では、「今月のめあてーあいさつ運動」、特活部では、「サーキット運動」について力を入れた。

表をつくり記述することで活性化させるのだが、「声掛け」の視点を入れての実践を目指した。例えば、生徒指導部では、今月のめあての表記を～名人になろうと変え子どもの意識とやる気を育てた。

それぞれの活動で子どもがやる気をもって《あいさつ運動の様子》取り組むための手だてを具体的に考えたのである。活動をこなすのではなく、子どもの意欲面からのとらえに目を向け、はげます声掛けを考えた。

② 学年での取り組みの実践事例

各学年の実践事例を生徒指導部の通信を活用し共通化をはかった。【自己評価・自己受容】は、主に教師の「声掛け」が有効とされているが、うまく機能してくると子ども同士でも成果が上がる。各事例が有効である上に、通信で定期的に交流することで、教師が再意識することが可能となり自らの実践を振り返る上でも効果的である。文字にし、文章化する意義は大きい。



5. 変容

本研究のアプローチを進めることで、本校の子どもはどのように変容したのか。協議の項でも触れたが、5月と10月の質問紙調査の数値を比較することで子どもの変化をつかむ。全校・学年・学級と順次変容を見ていく。

○全校 全体的に緩やかな改善がみられる。

今年度力を入れた自尊感情の3観点の【自己主張・自己決定】においては、[あまりあてはまらないとあてはまらない]のポイントが33→33で、ほとんど変化がない。しかし、【関係性の中の自己】は、25→22と、3ポイント改善し、【自己評価・自己受容】では、51→44と7ポイントも変化がみられた。項目でみると、『自分にはよいところがある』と感じている子が8ポイントも増えて、『自分のことが好き』と答えた子も3ポイント増えている。※全校児童412名 [資料12参照]

○学年 各学年各学級で傾向に違いがみられる。

低学年は、比較的【自己主張・自己評価】が高い。

- ・1年生は、質問項目の『自分で決める』と『自分にはよいところがある』『あいさつ』で「あてはまらない」と答えた子は、いない。
- ・2年生は、『自分が好き』で「あてはまらない」と答えた子が7ポイント改善されている。

中学年は、「あてはまらない」方に結果が少し移動している。

- ・質問項目の『ありがとう』『あいさつ』で「あてはまらない」と答えた子は、いない。

高学年は、「あまりあてはまらない」と「あてはまらない」をあわせた割合には変化がないが、「あてはまらない」子の割合は減少している。

- ・5年生は、『自分のことが好きでない』と答えた子が、7ポイント減少した。
- ・6年生は、『自分にはよいところがない』と答えた子が、11ポイント減少している。

[資料12参照]

今年度、力を入れた自尊感情の向上については、一定の成果がみられたと捉える。特に3観点の中の【自己評価・自己受容】の観点では、自分のことを少しずつ肯定的にとらえられるようになっていくことがわかる。

勿論、数値だけでない。実際に感じる雰囲気の変化がある。肌で感じるという表現が相応しいのかもしれない。登下校の昇降口でのあいさつや清掃中の子どもの取り掛かり方など数値化は難しい。しかし着実に変化しているのを感じる。子どもの言葉・まなざし・表情からである。指導の賜物だと思う。

このような成果につながったのは、全教員での協議と振り返りと繰り返しによるところが多いと感じる。子どもの実態をより客観的にとらえ、それに応じた指導を全員で協議し、共通理解のもと実践していく。そして、振り返りを絶えず行い改善し、繰り返し実行していくことが、よい方向への変化につながった。

[資料12参照]

VI. 研究のまとめ・成果と課題

教職員が気持ちをそろえ、一つの目標に向かっていくことは、大きな力になることを再確認した。子どもの自尊感情の向上を目的とし、なかでも【自己評価・自己受容】に視点を合わせて方法を考え実践することで、成果を上げることができた。

「声掛け」という大きな括りの表現であったが、日常のあらゆる場面でその子に応じた「声掛け」の方法を考え全教師で実践をくり返すことで、子どもの自尊感情を育てていくことができたと考える。承認して居場所をつくっていくというメッセージが、子どもに届いたと思う。

荏隈小学校で実践した方法を《荏隈小メソッド》とし、子どもの指導について模索している学校で、是非一つの方法として参考にしていただければと思う。

荏隈小メソッド

調査（実態把握） → 分析 → 協議 → 検証・改善
 ↑
 （具体的な方法）

各過程でのポイント

調査 （実態把握）	○日常の見取りに加え、客観的なデータである質問紙調査を行い集団の傾向をつかむ。 年2回実施し変容をつかみ方法を改善する。	・5月上旬 10月下旬 ・アイパット活用
分析	○全校で質問紙調査を実施する。 データは、目的に応じて棒グラフ・レーダーグラフ等にする。 ※膨大なデータで集約には時間を要するが、今回アイパットの機能を使い短時間でできた。 自動集約は、質問紙調査集約では予想以上の働きが可能である。	・アイパット活用 ※自動集約
協議	○共通意識の基動き出すのに、協議は不可欠である。	・協議グループの編成 異学年・同学年
検証・改善	○声を掛け合い、目と心を配り、集団で実行していく。	・振り返り ・繰り返し

これらの過程の中で最も感じたことは、子どもに対して大切であることは、教師にとっても一層意味があるということである。教師自身の自尊感情をあげていくことが重要なのだ。それは、指導の自己決定であり、仲間との関係であり、管理職との関係であったりする。自分で決定することや同僚とよい関係を築き管理職から温かく見守られることが、それぞれの教師自身の力を発揮していくことにつながる。担任が変化し子どもが変化する。そして、子どもの変化を感じて教師も変化する。今回の協議には、その力がある。会議の始まりには、エンカウンターを取り入れると効果が上がる。教師への教科外の研修活動も取り入れたりするとよい。子どものみならず、教師にも人間関係プログラムを取り入れるべきである。キーワードは承認と居場所であろう。3学期あと少しであるが、まとめを来年度につなげたい。